

## 265

## 肺癌症例における経口カプセルVP-16-213

の phase II study

京大胸部研内Ⅱ 松井祐佐公，門 政男，大島駿作  
 名古屋大学内Ⅰ 下方 薫  
 国療刀根山病院 故伊藤文雄  
 長崎大学内Ⅱ 原 耕平  
 熊本市市民病院 志摩 清  
 国療沖縄病院 源河圭一郎

原発性肺癌症例に対して，経口VP-16 100~160 mg/m<sup>2</sup>を5日間連続3~4週間間隔で投与し，肺癌取り扱い規約に準じて，VP-16の効果及び毒性を検討した。評価可能症例は86例，その内訳は小細胞癌62例，類表皮癌8例，腺癌9例，大細胞癌6例，腺類表皮癌1例であった。奏効率（R.R.）は全症例で24%であったが，18例（21%）にMRを認めた。組織型別では，小細胞癌及び類表皮癌で各々31%，25%のRRを示し，類表皮癌，腺癌及び腺類表皮癌で各々1例にMRを認めた。小細胞癌において，前治療の有無では，有27%，無33%のRRであり，VP-16は前治療薬と交叉耐性を示さなかった。血液毒性は，白血球4000/cmm以下は64%認め，1000/cmm以下は2例あり，白血球減少は，dose limiting factorとなった。一方，血小板数10万以下は5%で，白血球減少に比し軽度であった。臨床毒性は，食思不振，嘔吐，下痢，口内炎等を認めたが，臨床管理はいずれも容易であった。また脱毛は76%と高度に認められた。以上より，肺癌症例に対して，経口VP-16の単剤としての有効性及び安全性が確認された。

## 266

## 肺癌に対するPodophyllotoxin半合成誘導体

NK171 (Etoposide) 静脈投与のPhase II study

NK171研究会（肺癌部会）

福岡 正博（大阪府立羽曳野病院）

仁井谷久暢（日本医科大学）

木村禧代二（国立名古屋病院）

はじめに：新しいPodophyllotoxin半合成誘導体NK171 (Etoposide)静脈内投与による原発性肺癌に対するPhase II studyを全国40施設からなる共同研究によって実施したので，その結果を報告する。

対象：組織学的または細胞診によって原発性肺癌と診断された症例を対象とした。5月1日現在における登録症例87例の組織型別にみた内訳は腺癌25例，扁平上皮癌9例，大細胞癌7例，小細胞癌45例，組織型不明1例であった。

方法：NK171 80~100 mg/m<sup>2</sup>/dayを5日間連日静脈内に投与した。

判定は日本肺癌学会効果判定基準に従って，施設外判定委員会によって症例の適格性を吟味するとともに腫瘍効果を判定した。

成績：登録症例87例中，不適格症例として除外された17例および脱落，判定不能とされた8例を除き，評価可能62例中，PR11例（17.7%），MR5例，（8.1%）であった。組織型別に見るとPRは小細胞癌においてのみ認められ，腺癌，扁平上皮癌，大細胞癌ではMR例のみみられただけであった。小細胞癌に限ってみると11/32（34.4%）の奏効率になり，前治療の有無別に効果を検討すると，前治療なしで4/10（40.0%），前治療ありで7/22（31.8%）の有効例がえられている。

因みに110~130 mg/m<sup>2</sup>/dayを5日間連日経口投与した評価可能例44例中，PR例は5例（11.4%），MR例8例（18.2%）であった。組織型別にみた経口投与の奏効率は小細胞癌において2/29（6.9%）にPRがえられ，小数例ではあるが扁平上皮癌に2/6（33.3%），腺癌に1/9（11.1%）の有効例がみられた。

副作用は評価可能62例ならびに評価不能とされた25例中，副作用の調査対象となりうる8例を加えた70例について検討した。

Phase I studyでDose limiting factorとなった白血球減少（<3,000/mm<sup>3</sup>）は静脈内投与で58.8%，経口投与で36.7%に認められた。食思不振，悪心・嘔吐などの消化器障害は静脈内投与43.4%，経口投与66.7%に発現し経口投与例の発現率が高かった。脱毛は，静脈内投与，経口投与ともほとんどの症例に発現し，発現率は81.9%であった。

結語：原発性肺癌に対してNK171静脈内投与によるPhase II studyを行った結果，全症例で17.7%，小細胞癌では34.4%の奏効率をえた。